様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０１４８

研究課題名（和文）神像表現における物語性の研究

研究課題名（英文）Study of Narratives Represented in Japanese Deity Sculptures

研究代表者
丸山　士郎（Maruyama, Shiro）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長

研究者番号：２０２４９９１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　神像は仏像とならんで日本彫刻史上重要な位置を占めながら、独自の研究方法が確立していない。本研究ではそれぞれの神が持つ固有の伝承や信仰という物語を根拠に神の姿（神像）が造られたはずであるという視点に立って、神像の表情や仕草を読み解き、姿にこめられた意味を探った。本研究で、広島県府中市所在の南宮神社神像群について、年齢や性格などを作り分ける神像彫刻史上の重要作品であることを考察したが、その点が評価されて同神像群は平成２９年度に国の重要文化財に指定された。

研究成果の概要（英文）：Specialized methods for studying Japanese deity statues are yet to be established, despite their importance alongside Buddhist statues in the history of Japanese sculpture. This study began with a hypothesis that representations of gods (in the form of deity statues) derive from narratives uniquely associated with each deity, in the form of beliefs or as told in legends. From this viewpoint, facial expressions and gestures of deity sculptures were analyzed for finding the meanings in their appearances. As a result, the group of Japanese deity sculptures at Nangu Shrine in Fuchu, Hiroshima Prefecture, was found to possess individualities in the representations of age and character, claiming the statues' considerable significance in the history of Japanese deity sculptures. This outcome led the sculptures to be designated as Important Cultural Properties in 2017 by the Japanese government.

研究分野：日本彫刻史

キーワード：神像　神道美術

１．研究開始当初の背景

神像彫刻は日本彫刻史上重要な位置を占めるが、作品数は仏像の方が圧倒的に多いこと、そして、神像は仏像の影響を受けて成立し、形式・表現にも仏像のものが取り入れられているという事情もあって、考察は仏像との影響関係に重点が置かれがちで、論述の方法も仏像研究と共通するところが多い。

仏の姿は経軌に定まっていて、表情や手足の仕草などについて製作者の工夫の余地は少ないため、研究の関心は製作の時期や事情、儀軌的な問題が中心になる。

一方、神には経軌的なものは無い。神々の姿は、その神固有の伝承や信仰という物語をもとに造られたと考えられるのである。例えば静岡・伊豆山神社の男神立像(重文)の表情は、滑稽なことで有名であるが、その背景には、それにふさわしい物語があったはずである。神像独自の研究方法が必要なことは明らかである。

神に関する物語の多くは現代に伝わらない。そのため神像は、表情や仕草、髪型、衣服など全てにわたって、なぜその形が選択されたのか、また、その形は何を意味するのかといったところが全く不明なのである。神像研究の進展のためには、神像の形の意味を少しずつでも解明していく必要がある。

２．研究の目的

本研究では、神像の表現における物語性に注目する。すでに述べたように、神の姿は、神の物語（伝承・信仰）が反映されているはずである。そのような視点に立つことによって、神像の表情、仕草、髪型、衣服などの意味を理解できる場合がある。

残念ながら、神に関する物語が伝わる例は稀である。しかし、神像の表現や物語には類型化が見られるので、ある像で得られた解釈を他の像に敷衍することは可能である。本研究では、なるべく多くの像を調査し、表現の意味を理解する手掛かりを得たい。

神像表現における物語性という視点はこれまでにないものであるので、その具体例を次に挙げる。

・女神像の年齢表現

奈良・薬師寺の八幡神、神功皇后、仲津比売の三神像(国宝)の身色は、八幡神が赤味をおびた肉色であるのに対して、その妃である仲津比売は白色である。八幡神の赤味は男性らしさ、仲津比売の白は化粧をした若く華やかな女性を意味する。女神でも神功皇后はわずかに赤味をおびている。それは、若く美しい存在ではないことを表している。前者が八幡神の妃、後者が母という人物設定（物語）に依っていて、身色は性別や年齢を表現する手段となっているのである。薬師寺像では、衣の装飾性によっても年齢の相違を表現しているが、同様の表現を用いた作品は他にもあり、ひろく採用されている可能性がある。

・神々の世界を具現化した作品

広島・南宮神社に伝わる１２世紀に製作された神像群は、新出の未紹介作品であるが興味深い表現が多い。特に注目されるのは、宮廷女性が着用する小袿（こうちき）を着ける女神像の中に、１体だけそれを着けない像があり、その像のみ両耳を表していることである。

同じような例は、平安時代の女性が多数描かれる大阪・四天王寺の扇面法華経（国宝）にも見られ、宮廷女性は耳が描かれないのに対し、庶民の女性では耳が描かれるものがある。

このことから想起されるのは源氏物語の横笛で、雲居の雁が泣く子に授乳する際に宮廷女性にははしたないとされる耳挟み（髪を耳に掛ける）をするシーンである。南宮神社像で耳を表すのは、耳挟みを意図していると考えてまず間違いない。さらに南宮神社像は、女性の美しさの要素の一つであった額髪（ひたいがみ。額際で短く切りそろえられた髪束）を、他像は正面に垂らすのに背面に垂らし、目も他像より垂れ気味に表されていて、美しさの表現が意図されていない。その姿は、扇面法華経や信貴山縁起絵（国宝）などに登場する庶民の女性に通じる。南宮神社には他にも、年齢や身分が異なると考えられる複数の男神と女神、さらに童子と他に例のない童女の像も伝わる。神祇では、あたかも神がそこに居るかのように衣服や化粧箱などを奉納するが、南宮神社の神像群は、物語として伝えられた神々の世界を具体化したものである可能性がある。

・異形を表す目

先述した伊豆山神社像の滑稽ともいえる表情については、その意味を知ることができる物語は残っていない。はたして滑稽さの表現であるのかもわからないが、瞋目（しんもく）と呼ばれる目頭部にも弧状の縁がある目の形式が採用されていることは、表情の意味を理解する手掛かりになるかもしれない。

瞋目は、平安時代以降の四天王像ではほぼ全ての像に採用される怒りの表現であるが、本来は仏や人でない異質なもの、あるいは異形のものを表す表現であった。神像の中には、四天王と同じ武装した姿で表されるものがあるが、目だけは瞋目でなく、人と同じ形であることが多いのもそのためかもしれない。そうであるとすれば、伊豆山神社像は古事記などに登場する異形の下等な神、あるいは異国の神という可能性が考えられる。ターバンのような被り物も含め、さらに検討が必要である。

以上のように、物語性という視点に立つと、これまで見過ごされてきた表現の意味が理解できることがあるわけであるが、身色や耳挟みの他にも、ヒゲ、面部の皺、目や口、顔

の輪郭、手足の仕草、衣の装飾性などが、物語性を考える上での手掛かりになると考えている。それら一つ一つの情報を組み合わせることによって、神像の姿の意味するところを理解できるのである。

３．研究の方法

・作品調査

作品調査では、形状や構造、彩色などについて詳細な調書を作成し、表現の意味を理解するヒントになる要素を探す。写真撮影には、一般的なデジタルカメラとしては最高画質（３６００万画素）のものを用いる。特に重要な作品については、撮影を委託して３億画素程度の画像を作成する。

彫刻作品の調査は対象を次のように分類して進めた。

① ９世紀中頃までに製作された最初期の神像。仏像の影響は強いが、神の表現が新たに創造された時期の作品である。
② 神像独自の表現を求め始めた９世紀末から１０世紀の作品。像の小型化、衣の襞の簡略化、脚部の奥行きの減少などの神像独自表が確立していく。
③ １１－１２世紀の作品。多様な神の表現が創りだされた時期である。
④ 鎌倉時代の製作で、表情や服装を写実的に表す作品が現れるころのものである。
⑤ その他の関連作品

・絵画作品の調査

絵画では、彫刻では表すことが不可能な物語性を造形化することが出来る。例えば、神の巨大さを彫刻で表すには物理的に大きく造る必要があるため制約があるが、絵画では画中に小さく人間を描くことによって表現出来る。情報量が多い絵画作品の分析は、彫刻を考える上で重要である。

・文献資料調査

古代中世の記録や神話、物語などの文学作品から、神の姿に関する記述、あるいは人の姿や仕草など、神像を考える上で参考となる記述を抽出し、神像表現の意味の解明のための資料とする。近世の神話についても収集する。

４．研究成果

神像作品調査を、「３研究の方法」で示した４期に分類して行った。主な作品は次の通りである。

① 最初期（９世紀中頃まで）
奈良・松尾大社　三神像

松尾大社像についてはすでに考察を加えたことがあるが、②の神像表現の確立期と関連して改めて調査を実施した。この期の神像は仏像の影響を強く受けているが、表情や衣の表現に、神像独自の表現となっていく要素がすでにみられ、どのように引き継がれていくのか検討する必要がある。

② 神像表現確立期（９世紀末‐１０世紀）
奈良・薬師寺　八幡三神象、
静岡・南禅寺　神像および木彫群
秋田・小沼神社　観音菩薩立像
石川・白山神社　男神坐像

薬師寺造はこの期を代表する作品であり、仏像的な表現と神像独自表現の混在が顕著な作品である。彩色もよく残っていて、③の時期の神像にみられる衣の文様との関連を考察するうえで重要な作品である。白山神社像は、未紹介の作品でこの期の本格的な作品として貴重である。

③ 多様な神像表現（１１－１２世紀）
広島・南宮神社　神像群
滋賀・飯道神社　男神坐像
個人蔵　神像群

広島県府中市の南宮神社の神像群に関する考察を論文にまとめた。論文では、諸像の目や口、顔の皺、装束などに注目して、諸像の間に年齢や社会的地位の相違があることを指摘し、神像社会を表すものと考えた。また、神社が所在する府中市には、古代地方行政の中心である国府が置かれていたと考えられており、諸像は、京都の宮廷文化を背景に造られたと考えた。なお、同神像群はこれらの点が評価されて平成 29 年度に重要文化財に指定された。

飯道神社像は上半身が裸形のもの、個人蔵作品の中には袍の襟を外す、いずれも希少な形式である。

④ 写実的表現（１３世紀）
島根・赤穴八幡宮の八幡三神像
福井・若狭神宮寺　男神坐像・女神坐像
（関連資料調査）
青森・恵光院　女神象
真如苑所蔵　大日如来坐像
京都・大報恩寺　十大弟子立像（快慶作）

平安時代までの神像は素朴な表現のものが多かったが、鎌倉時代になると一流仏師によって造られたと考えられる神像が残る。それらは表現意図が明確で神像表現を考察するうえで重要な資料である。

⑤ その他
中国・陝西歴史博物館保管の墳墓壁画
中国・故宮博物院のインド・中国彫刻

神像の中には異国人風の作品が少なからずある。おそらく仏教美術として日本にもたらされた表現と考えられ、西域やインド作品の表現との関連を考察した。

仏教彫刻の神将形像などにみられる瞋目は怒りを表す形状であるが、9 世紀末頃までは怒りとともに異形であること示すこともあった。10 世紀以降、異形としての表現はしだいに形式化して意味が忘れられていくが、神像彫刻にもしばしばみられ、異形との関わりが注目される。瞋目は、8 世紀に中国から

伝わったものであるが、706 年に完成した墳墓の壁画にも異形の表現として用いられている。日本における瞋目の異形性の源流は中国にある可能性がある。

以上の彫刻作品のほか作品は少ないが絵画の神像についても調査した。絵画作品は、彫刻よりも表現の意図が明確であり、また彫刻では表現できない神の大きさなどを表現するものもあり、神の物語性を考えるうえで書くことができない。主な調査作品は次のとおりである。
京都・神護寺　僧形八幡神画像
京都・仁和寺　僧形八幡神影向図
京都・陽明文庫　春日鹿曼荼羅
大阪・藤田美術館　春日明神影向図

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
① 丸山士郎、真如苑所蔵　大日如来坐像のＸ線断層写真（ＣＴ）調査報告、MUSEUM、668、査読有、2017（未刊行）
② 丸山士郎、広島・南宮神社神像群と神像の物語性、MUSEUM、652、pp.7-36、査読有、2014、

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　4 件）
① 東京国立博物館等編、平安の秘仏、総ページ 93、2016 年
② 東京国立博物館等編、ほほえみの御仏、総ページ 20、2016 年
③ 上海博物館・陝西歴史博物館編、醍醐寺芸術珍宝、総ページ 224、2016 年
④ 東京国立博物館等編、みちのくの仏像、総ページ 102、2015 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
丸山士郎（MARUYAMA,Shiro）
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長
研究者番号：２０２４９９１５

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)